

[インタビュー]
下着をめぐる眼差し

明治大学教授 鹿島茂

Interview: Eyes on underwear in Western History

Shigeru KASHIMA, Professor, Meiji University

In the Renaissance period in Europe, the practice of bath-taking was regarded as a hotbed for the Black Death and syphilis, and the custom faded away. After the disappearance of this custom, underwear became very susceptible to unsanitariness due to human scurf, so changing one's underwear frequently became a symbol of wealth, and sparkling-white linen underwear was an emblem of the rich for a long time. Linen underwear was however eventually replaced by cotton underwear: Britain colonized India by military means, transplanted Indian cotton to the United States and cultivated it there, developing a major cotton production industry. The combination of capital earned from the British-led triangular trading, a great supply of cotton fibers, and inexpensive labor resulting from the takeover of Scotland by Britain triggered the Industrial Revolution. When the supply of cotton cloth eventually became abundant, cotton fiber became gradually reduced in value. As the material used for expensive underwear, silk became popular.

In Europe where white underwear was traditionally a symbol of wealth, the sexuality of underwear became conspicuous after the 19th century. More specifically, the subject of bottom underwear was regarded as an extreme taboo. Women's shorts, which had evolved to subdue the feeling of embarrassment, took on the role of intensifying desire precisely because they were so thoroughly hidden from view, and they themselves became an object of desire.

How were the desire and phantasm concerning underwear represented and reproduced? One of the media useful in responding to this question is men's magazines, which appeared with the development of journalism. Phantasm about underwear increased through the illustrations carried by men's magazines. Many men's magazines were published from around the end of the 19th century. The magazines issued later became more direct and extreme. Especially during the First World War, men's magazines more often carried sensational and extreme illustrations

to catering to soldiers in the battlefields. Some of the contributors of those illustrations later became first-rank painters and illustrators. Those erotic magazines provided emerging artists with good opportunities to make their debut.

下着の見せびらかし文化

鹿島：下着というとなたちは木綿をすぐ連想しますが、木綿はヨーロッパでは意外に新しい素材です。木綿は亜熱帯、つまりエジプト以南でないと採れないから、ヨーロッパで木綿が下着の主流になるのはイギリスがインドを植民地化して以降のものになります。インドから後にアメリカへ渡り、18世紀後半から登場します。それ以前は、寒冷地帯であるヨーロッパの下着は麻や亜麻が基本で、主にリネン文化なんです (Fig.1)。

このリネン製の下着文化にも様々な変遷がありました。大きな転換期を迎えるのは、英仏百年戦争からコロンブスの新大陸発見前後です。英仏百年戦争の際にペストが大流行し人口が半減するものの、ルネサンス期に急増します。その人口急増期にヨーロッパの人々は急にお風呂へ入らなくなってしまうのです。ペストの流行と新大陸から流れ込んだ梅毒が主な原因です。

KCI：ペストと梅毒によって、入浴が廃れてしまうのですか。

鹿島：公衆浴場が病原菌の巣窟と見なされ、以後お風呂は500年もの間、廃れっぱなしになります。ただ、入浴が廃れたことと下着文化とは非常に関連性を持っています。やっぱりお風呂に入らないと人間の体から垢が出ますよね。そうすると垢や垢じみたものが嫌われ、人々は下着を頻繁に取り換えられることに富の象徴を見出すようになります。入浴が廃れた結果、いかに真新しい下着を身に着けているかに付加価値が生じるようになるのです。真っ白なリネンの下着が金持ちのしるし。私はこれを「下着ドーダ」と言っています。「ドーダ、凄いだらう」という見せびらかす思いで下着を着用するのです。たとえば、16世紀のフランス国王フランソワ1世は真っ白な布地をふんだんに用い、権威や財力を下着によって表象しています。

KCI：真っ白なレースは綺麗で、贅沢なものの象徴として衣服の装飾によく使われますが、やはり白い下着と関係があるのでしょうか。

鹿島：服から下着をそのまま出すとみっともないから、レースでその延長とするんでしょうね。またヨーロッパは洗濯文化がないに等しいから、下着のリサイクルシステムが起こってくるんです。金持ちは一回着ただけで召使に与えるため、古着市場が非常に活発化し

ます。パリのレ・アール周辺やタンブルには、下着のリサイクルマーケットがたくさんありました。

さらに人口が増加したら下着の生産やリサイクルも増え、印刷術と相まって紙の供給が増えるという面白い現象が起こります。ヨーロッパには紙すきの技術が中国から伝わるものの、紙すき技術に適した木がなかったため、ほぼ使い道のなくなったリネンから紙を作ります。だからヨーロッパでは、人工が増加しない限り紙の生産量も増えません。パルプから紙を作ることによりやく気づいたのは、フランスでは 19 世紀後半ですね。バルザックの小説『幻滅』には、パルプから紙を作るという発明に情熱を注ぐ、青年ダヴィッド・セシャルが登場します。

KCI：ヨーロッパの書籍は、下着から作られていたんですか。

鹿島：下着からできているので、紙は生産量が限られ、非常に値段が高く、金持ちの所有物になっていきます。そこで、18・19 世紀に登場するのが「シフォン (ぼろ布)」の回収をしていた「シフォニエ (屑拾い)」です。彼らは主に捨てられた下着を回収しており、朝一番に下着を漁りにやってくる姿が街の風景の一コマになっていました。そんな屑拾いが集って掘立小屋を建てたのが、クリニャンクール (蚤の市) の始まりです。ヨーロッパのリサイクルシステムでは、毛織物の上着もリネンの下着もひとつたりとも無駄にしません。

ただ、麻や亜麻の下着は高価なものという状態が続いたんですけど、そこに登場したのが木綿です。当初、イギリスとフランスはインドから木綿を輸入しており、木綿は麻や亜麻よりもはるかに高価な貴重品でした。だから、小さくとも真っ白い木綿のハンカチなどは人前で見せびらかしたくなるわけです。

KCI：肖像画でハンカチを持った人物が描かれるのは、そのためですか。

鹿島：必ず描かれるでしょう、ハンカチ。それと呼応する形で流行したのが「プリーズ (嗅ぎたばこ)」です。嗅ぎたばこを吸うと鼻に入れてむずむずするので、当然ながらくしゃみをします。そこで木綿のハンカチを取り出し、見せびらかす「ハンカチ・ドーダ」になるんです。

木綿が高価な 18 世紀は、木綿を見せびらかすために服飾がどう進化するかという感じですが。ただ、木綿はリサイクルに向かず良い紙を作らない。これがリネンとの最大の違いです。よって木綿が輸入品であると高価な上に貿易赤字が出てしまうから、イギリスは七年戦争でインドを手中に収めます。そこで得たインド木綿をイギリスは植民地のアメリカへ持っていき、栽培して、競争相手となるインド木綿を撲滅してしまうんです。さらに木綿の大生産地をアメリカにつくったら、労働力が必要になりますよね。それゆえ、三角貿易です。イギリス人が鉄砲や宝飾品を持ってアフリカの西海岸に出かけ、黒人の王に品物

を見せると、王が隣村から奴隷を連れてきて、品物の対価を人で支払うんです。次にイギリス人は奴隷をアメリカへ連れて行ってオークションにかけ、得たお金で綿花を買い、イギリスへ持ち帰って木綿工場を興します。三角貿易で儲けた資本と大量の安い木綿、そしてスコットランド周辺を併合して得た安い労働力、これらによってイギリスで産業革命が起こったわけです。

産業革命が起こると、木綿が最も機械生産に適していたこともあり、綿布は大量に出回って、次第に値段が安くなっていきます。安価になっていく木綿にステータスを見いだせなくなると、今度は絹を用いるというさらなる贅沢が起こります。

KCI：それで下着に絹が使われていくのですね。絹はヨーロッパでは早い時期から服地として使用されていました。

鹿島：中国から入って使われてはいたけれど、絹の生産量は増えなかったんです。とりわけ 19 世紀半ばに絹の疫病があって、ヨーロッパの絹は壊滅したとも言えます。歴史上、絹が採れなくなる状況が何度かあるわけです。

KCI：絹製の下着は色彩が豊かで、装飾が華やかなものが多いです。これは見せびらかすという文脈で考えてよいのでしょうか。

鹿島：もちろん、そうです。「グリゼット（女工）」というフランス語があるでしょう。このことばは、木綿のドレスにあまり色がつけられず、「グリ（灰）」にしか染められなかったことと関係しています。若くて、はすっぱな女工が深い灰色の最も安い綿ドレスを着ているから、「グリゼット」と言うんです。

KCI：絹は染まりやすいからこそ、絹を用いて下着の色を華やかにできるようになったということですね。

鹿島：いずれの素材にせよ、下着の歴史は、貴重品が上流階級から下の階級に下りてリサイクルされるのと、貴重品に似たものを大量に安く作ろうという人間の工夫ですね。古くから繊維産業とは、より安い労働力を探して世界システムの中で次々に拡大していく、それをいまだに行っているのがファストファッションです。産業革命もファストファッションも下部構造的には共通しているのです。

下着への欲望

KCI：階級社会において下着は見せびらかすという行為に関係しているからこそ、素材の贅沢化が進行していきます。

鹿島：見せるための下着は、限りなく贅沢化していきます。現代のブランド服みたいなも

ので、高くても格好良ければいいという感じです。貴族の女性たちは宮廷で「ドーダ」合戦をする一方、ファッションを下々の者に見せなければなりません。自分たちが着飾っている姿を見せることが義務のようなもので、そのために不思議な現象が 18 世紀末のフランスで起きるんです。それは「ロンシャン」ということばで表現されます。「ロンシャン」と聞くと、私たちはロンシャン競馬場を想像しますが、実は全然違うんです。現在、ロンシャン競馬場がある周辺にクララ会修道院があったんですよ。クララ会修道院は厳格な女子修道院ではなく、隠退女性向け介護つき豪華マンションのようなところで、未亡人や宮廷から退いた上流階級の女性たちを専門に施設を提供していました。隠退したにもかかわらず、女性たちは娯楽が欲しくて、馴染みのオペラ俳優や歌手などを修道院に招くんです。それが一大イベントになって評判を呼び、パリ中の人々がこの修道院を見学に来るわけです。シャンゼリゼ周辺からロンシャンまで馬車が並んで渋滞するから、民衆は沿道でその馬車に最高級の贅沢をします。その馬車の行列によって服飾流行が生れるため、フランスでは昔からファッションショーをやっていたと同然です。

KCI：シャンゼリゼ通りでファッションショーというのは、実に大きなランウェイです。

鹿島：シャンゼリゼはそのために発達しましたからね。時々、誤訳で見つかるのが、「フェール・ロンシャン faire Longchamp」というフランス語を、まだ競馬場ができていない時代に「ロンシャン競馬場へ行く」と訳すこと。本当は「フェール・ロンシャン」とは、「贅を凝らしたパレードをする」という意味なんです。馬車屋は最高級の馬車をシーズンに合わせてつくって、もうほぼスーパーカーのショーですよ。モーターショーとファッションショーがドッキングした形式です。

KCI：近年、東京や海外主要都市のファッションショーは、メルセデス・ベンツがスポンサーについて開催されています。約 100 年を経て、またファッションと車が結びついています。

鹿島：男性は乗り物と一緒に贅沢をする妻や妾を見せびらかす。昔は見せびらかし文化で、ファッションに機能性はほぼないんですよ。機能性が重視されていくのは、シャネル以降のごく最近です。ファッションは一貫して階級社会のもので、王族の次が貴族、貴族の次がブルジョア、ブルジョアの次がミドルクラスというように順送りです。

KCI：ところで、19 世紀以降、下着はやはりセクシャルな面が強く出てくるという印象を持っています。

鹿島：抑えつつ強く出すという感じで、下半身に関して抑圧が強く、非常に禁欲的です。少しでも下半身が見えると、エロチックな印象になりますね。ヴォクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』において、リュクサンブール公園で風が吹いてこぜっとの下着と足が

垣間見える場面があるんです。すると彼女の跡をつけていたマリウスが、コゼットの下着や足を傷痕軍人が見たというので、傷痕軍人を殴り倒したいと思うといった具合に、下半身の場合は非常にエロチシズムを掻き立てるんです。

他方で、上半身はかなり開放的ですよね。中世においてさえ、女性が乳房を露出するようなファッションが流行り、そういう恰好で皆が教会に来るから、逆上した聖職者が女性の乳房にワインをぶちまけたという話もあるぐらいです。ただ、開放的だと言ってもあくまで現実のレベルで、言語のレベルでは違うんです。言語レベルでは、乳房を直接表現してはいけないから、少し場所をずらして「ゴルジュ（喉）」と表現する。「ゴルジュ」は乳房を近接のことばで表したメトニミーになり、喉が乳房の意味になります。だから、ブラジャーはフランス語で「スーティアン・ゴルジュ（胸支え）」と言うでしょう。とくに 18 世紀の小説では、ゴルジュを「喉」とそのまま訳してはいけない場面が多いんですよ。

KCI: 乳房とははっきり言うのが憚られたということですね。

鹿島: 文字通り、憚りですよ。フランスでは、パンツの登場は 20 世紀に入ってからですからね。日本には白木屋火事伝説がありますが、フランスにもプランタン火事伝説があるんです。老舗デパートのプランタンは 20 世紀初めに火事で焼けてしまうんですが、女性が非難する際にスカート内部や恥部が見えてしまったから、やはり女性にはパンツが必要という話なんですね。

KCI: パンツをはかなかった女性がパンツをはくようになるというのは、劇的な変化だと思のですが、どのような理由からだと考えますか。

鹿島: フランスでは二度ほど、女性のパンツが現れた時期があり、パンツの登場は乗り物と深く関係しています。そのひとつがカトリーヌ・ド・メディシスの事例で、彼女は綺麗な肌や脚が自慢で、それらを見せつけるために乗馬をしたんです。当時は横乗りでしたから、カトリーヌは下からのぞかれないようカルソン（パンツ）を着用していたんですね、カトリーヌの後、すぐにカルソンは廃れてしまいました。もうひとつは、19 世紀末の自転車。自転車こそが女性を長年の屈従から、つまり一カ所に留まっている生活から解放する道具だと説いて、フェミニストたちが盛んに頑張るんです。自転車に乗る女性は自由であるということですね。それでニッカーボッカーズのような恰好が大流行して、カルソンが再び着用されるようになります。それ以前はペチコート文化で何枚も重ね着していました。それが輪骨入りのペチコート（クリノリン）の登場により下着は軽量化しました。ちなみに、クリノリンのメーカーで、クリノリンが廃れた後に自転車メーカーへ転身したのが、自動車メーカーのプジョーですよ。

ここで興味深いのは、女性のパンツは当初、恥ずかしさを防ぐためのものとして登場し

ますが、やがてパンツはそれ自体が欲望の対象となる。隠すと、隠したものと欲望がシフトし、フェチシズムが生れるんです。

KCI：19世紀にコルセットでウエストを過剰に細くするのは、ある種のフェチシズムかなと思います。

鹿島：ウエストの細さが競われる時代は、ブルジョアの隆盛と重なります。貴族は働かないけれど、ブルジョアは働かないといけません。その代わりに女性は働かないので、労働から無縁である女性の姿に価値が出るわけです。運動していない体や運動しにくい体が重要視され、ウエストはより細くなっていくんです。

見られ、欲情させる下着

KCI：フェチシズムをはじめ、下着への欲望や幻想はどのように表象され、複製されるのでしょうか。

鹿島：ジャーナリズムが発達すると、今で言う『プレイボーイ』のような男性誌がたくさん登場して、そのような男性向けの絵入り雑誌を通して、下着ファンタズムが男性に広がっていきます。視覚文化は複製文化ですから、オリジナルではなく、複製したり、隠ぺいしたコピーにも欲望が移っていきます。最初、ひとつのファンタズム文化が生まれると禁圧されるものの、そこに欲望が集まり、アバンギャルドなファッションリーダーがそれを引っ張り出して身に着けると、時代のファッションになります。ある時代に禁じられたファッションが、次の時代のファッションになるというわけです。

KCI：タブーを破ることに新しさや恰好よさを感じるんですね。そう考えますと、それこそ下着は性のタブーと関わります。

鹿島：ホモセクシュアリティは潜在的にあったとしても、フランス文学に登場するのは19世紀末になってからで、19世紀前半にあからさまなものはほとんどありません。ホモセクシュアリティやトランスジェンダーは、文化が爛熟しないと出現しないんです。「衣食足りて変態を知る」ということで、衣・食が足りていないところからそういうものは出てこないんです。

ただ、男性向けの絵入り雑誌に目を向けてみますと、当時の人々がどのようなものにエロチシズムや性の欲望を感じ、いかなるものをタブー視していたかなど、さまざまなことを一目瞭然に知ることができます。男性誌は19世紀末からいくつも刊行され、後発の雑誌ほど直接的に、過激になっていきます。ひとつの雑誌を取り上げてみても、時代を経るごとに過激化していきます。とくに第一次世界大戦中の男性誌は過激です。というのも、

第一次大戦で戦場に送られた兵士を慰安する目的で、グラフィックな男性誌はいずれもが扇情的で官能的な誌面を構成するようになるからです。19世紀末の男性誌のはしり『ル・リール』には、ロートレックやスタンランがイラストを描いており、構図の多くは中年男性が若い娼婦を買ってどうこうというものです。また、娼婦や若い女性が誘惑されて云々というよなことを描いた雑誌『ジル・ブラス』も過激ですね。そしてこれらの雑誌よりも過激化したのが『ル・スーリール』で、ほぼエロチック雑誌です。しかしながら、単なるエロチック雑誌と切り捨てられないのは、このような媒体は新人のイラストレーターがデビューを果たすのに一番向いているので、後に著名になるイラストレーターがしばしばイラストを描いているんですよ。

シャルル・マルタンのデビュー作があったり、結構モダンな人がイラストを描いているから侮ってはいけません。日本の漫画家、岡崎京子がエッチ漫画でデビューしたようなもので、面白いイラストがいくつもあります。フランスの男性誌では、年配の男性が若い女性を見つめる構図が多いんですね (Fig.3)。シャルル・マルタンやジョルジュ・バルビエが数多くの挿絵を描いた『ラ・ヴィ・パリジエヌ』には、男性があからさまに女性を凝視するイラストが描かれています。そして女性を見つめる男性の姿から、女性の裸体そのものが描かれていくようになるんです (Fig.4)。

KCI: このような男性誌の読者層はどのような人たちで、雑誌自体の価格はいくらぐらいだったんですか。

鹿島: 購読者はイラストでよく描かれている男性に近いと思います。雑誌自体は1部15サンチーム (=3スー) だから、当時の物価からすると1スーは50円程度で、つまり150円。かなり安価ですが、当時、雑誌は原則的に定期購読ですからね。また、男性誌にはたくさん広告が掲載されているものの、精力剤や薄毛防止、痩せ薬や性病治療など、結局、今日の男性誌に掲載されている広告とほとんど変わらない内容です。

KCI: 広告は現代とほぼ同じと言えます。多くの古い書籍を所蔵していらっしゃいますが、下着が描かれているもので興味深い本や雑誌はありますか。

鹿島: アンリ・ブテがイラストを描いた『デザヴィエ・オ・テートル (舞台のヌード女優)』は、下着や女性の裸体を見せつけるエロティックな目的で描かれており、ブテ自身が女性の官能的な面を描くのが得意です。さらに下着のイラストがたくさん掲載されているのは、「ボン・マルシェ」や「プランタン」などのデパートのカタログですね。『デパートを発明した夫婦』(講談社 1991年)を執筆した際、ボン・マルシェのカタログやアジャンダ (日記・手帳) はデパート研究にとっても役立ちました。とりわけアジャンダは、家計簿や読み物、ファッションの宣伝などからなり、写真のレベルも非常に高く、デパート芸術と言えるも

のです。ファッションや下着の写真はこのような媒体から発達していったのでしょうか。

KCI：今回はヨーロッパの下着文化について興味深いお話をしていただき、ありがとうございました。

(聞き手：石関亮、新實五穂)

〈図版〉

- Fig. 1. 16世紀中期のイギリスにおける麻製下着（シフト） KCI所蔵
Linen underwear or shift made in England in the middle of the 16th century. Collection of The Kyoto Costume Institute.
- Figs. 2. 「ロンシャンの散策」ジャン＝アンリ・マルレ（絵）、ギヨーム・ド・ベルティエ・ド・ソヴィニー（文）
『タブロー・ド・パリ』 鹿島茂所蔵
“Promenade de Longchamp [Walk of Longchamp],” illustrated by Jean-Henri Mrlet, written by Guillaume de Bertier de Sauvigny, in *Tableaux de Paris*. Collection of Shigeru Kashima. ©NOEMA inc. JAPAN.
- Figs. 3. 『ジル・ブラス』1895年1月27日号 鹿島茂所蔵
Gil Blas, 27 January 1895. Collection of Shigeru Kashima. ©NOEMA inc. JAPAN.
- Fig. 4. 『ファンタジオ』1918年1月1日号 鹿島茂所蔵
Fantasio, 1 January 1918. Collection of Shigeru Kashima. ©NOEMA inc. JAPAN.

鹿島茂（かしましげる）

作家・フランス文学者・古書コレクター。現在、明治大学国際日本学部教授。神奈川県横浜市出身。19世紀フランス文学を専門とし、1991年『馬車が買いたい！』でサントリー学芸賞受賞、1996年『子供より古書が大事と思いたい』で講談社エッセイ賞、1999年『愛書狂』でグスナー賞、2000年『パリ風俗』で読売文学賞を受賞。

(※肩書は掲載時のものです)